

新鮮で貴重なデータをもたらす

新しい 海洋気象学

能沢源右衛門著

A5/¥1,500

地球表面の約七割を占める海洋と、これをすっぽりと包みこむ大気との相互作用を理解せずして海洋気象学はなりたない。まして、日本とその近海は太平洋とユーラシア大陸との境界に位置し、相互作用にもとづく変化の最も大きな地域である。本書は、気象と海象を相互に密接な関係をもつという見方に立ち、様々な新しい知識を積極的にとりいれて、基礎知識を展開する。さらに、学問的に、海洋開発に、そして船舶運輸上にすぐ活用できる、多くの新鮮にして貴重なデータを提供する。新しい学問の魅力が、図版を豊富に使用し平易な解説重点を強調する親切な編さん、海洋気象用語の説明等により倍加。著者は海上保安大学校教授

海図の知識

生きた知識を与える

著名・坂戸 共著
A5・¥1800

本書は、海図の内容はついて詳しく説明し、測量からの海図のできるまでの行程、海図の見方・使い方について詳しくのべ、あわせて水路通報、海図の改補、航路標識水路誌および潮汐表などの水路図誌全般はついて解説し、さらには海図の特性、将来のあり方を論及

楽しみながら学べる 百萬人の 天気図

宮内・田島共著
A5・¥850

「三日先の天気かわかれば長者になれる」ということわざがある。それだけ生活に密着した天気。これをより科学的に理解して、趣味と実益を結びつけようとするところも本である。天気図作成法、予報の考え方に重点をあてるとともに遭難例も識りませて説明している

東京都渋谷区富ヶ谷1の13
郵便番号151

成山堂書店

電話 03(467)7474~8
振替口座東京78174番

<新刊紹介>

熊沢源右衛門著 新しい海洋気象学

A5版 316頁 (成山堂書店刊行)

「大気・海洋間の相互作用」——近年流行(?)のテーマのひとつである。この大問題は昔からあった。大気は地球表面の約70%を占める海洋に接している。海面を通じて、大気と海洋とは互いに大きな影響を及ぼしあっていることは明らかであるが、ただ、それがあまりにも大きく、且つ、複雑であるために、究明することが極めて困難で、現在に至っている。近年、新しい観測の手段や計算機の発達によって、この大問題へのアプローチが各国において意欲的に試みられており、今や流行テーマのひとつであるようにみえる。

大気・海洋間相互の影響の大問題はしばらく措くとしても、気象学と海洋学とは、それぞれ独立・無関係の学問ではない。気象学における諸概念と、海洋学におけるそれらとの間には、共通したものが極めて多い。両者の発達過程をみても、気象学の方から海洋学に導入されたもの、またその逆の場合、がいくつもみられる。大気も海洋も、同じく流体であるからには、共通した現象があり、共通の概念でとりあつかえることが多いのは当然であろう。

本書は、大気と海洋、気象と海象とをひとつに結び

つけた立場から、一貫した表現で記述してある。講義ノートを基礎に、年々の新しい文献からの知見をも加えて、特色ある表現で本書をまとめられた著者の労苦を多としたい。かつて定点観測船の気象長として、太平洋上の海洋気象をつぶさに観察、体験された著者の考え方がしみじみと紙背に感じられるのは、当時、船こそちがえ同僚として、洋上で同じ体験をしたからであろうか?

気象学も海洋学も、自然科学の他の分野にくらべると、まだまだ若い学問である。対象が大自然であり、これは極めて複雑であるから、学問としての進歩が緩慢なものしかたがない。しかし、「気象学と海洋学はこれからも、長い間、活気にあふれた、若々しい学問であり続けるに違いない。」と、著者は本書のはしがきのなかで述べているが、全く同感である。つまり、いくらでも、やり甲斐のある学問ではないか? 本書が多くの人々に読まれることを、そして気象学・海洋学が更に先へ発展してゆくことを望んでやまない。

河村 四朗